鍵のかかる部屋

三浦朱門

鍵のかかる部屋

三浦朱門

集英社

鍵のかかる部屋　定価八八〇円

一九七八年六月一日　初版印刷
一九七八年六月十五日　初版発行

著者　三浦朱門
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
〒一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話　二三〇―六三六一（出版部）
二三〇―六一七一（販売部）
印刷所　図書印刷株式会社

検印廃止。落丁、乱丁本はお取り替えします。
0093―772146―3041
© S. Miura, Printed in Japan, 1978

三浦朱門＊鍵のかかる部屋＊目次

鍵のかかる部屋　7
職探し　35
ボス　69
カエサルの物　99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

下士官　121
妹　151
冬の初め　183
肌着　227

装画　三輪　滋
装丁　竹内宏一

鍵のかかる部屋

鍵のかかる部屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一

雨戸を閉めきった三畳の書斎にいると、予定通り八時半に大阪の兄から電話がかかってきた。毎週、明男は兄とこうして定時に話をすることにしていた。もっとも用があって家にいないことがあっても、わざわざそれを知らせることはしない。いなければいないで、それだけのことだった。電話料は兄が払う。彼は明男と違って実業界に入ったから、大阪・東京間の電話代にハラハラしない程度に金ができたのだろうが、彼も淋しいに違いない。

「明男か」

「ええ」

「どうだね」

「今年は芝がダメになりましてね」

「ふーん、どうダメなんだ」

芝生は五月半ばになっても、枯れたままの部分が残った。それは禿げかけて毛がまばらになりかけている明男自身の鬢のように心許なかった。芝は去年の夏から生え方に勢がなかった。東半分はそれほどでもないが、西半分は真夏でも緑の葉よりも枯れた部分が目立った。芝刈機を押してゆくと、東半分は抵抗が強く、心臓が苦しくなるほどなのに、西半分に来ると、空車を押すように、芝刈機は進む。

今年は四月ごろから雑草が多かった。禾本科系の二三種は昔から見なれているが、クローバや豆科らしい雑草が四種類ばかり、そのほかマツバボタンに似たものがあって、それらを丹念に取ったら、芝生は月の表面の写真のようになった。

雑草のおかげで弱ったのか、芝が弱ったから雑草がふえたのか、どちらが雞で、どちらが卵であろうとも、芝がダメになりかかっていることは確かだった。

若い時、高原の療養所にいた兄に言わせると、その火山灰地の療養所では、雑草を刈って、刈って、刈りつくすと、最後にその土地に固有の芝が残ったのだという。専門家でもなく、園芸に特に趣味があるとも思われない兄の言葉を、明男は信ずる気にならなかった。それを言うと、相手の声は気色ばんだ。四つ違いの兄は子供のころから、弟に口答えされると、急に怒り出すのであった。

「ヨーロッパを見ろ。あそこは日本みたいに植物が自然に繁茂する土地じゃないんだろうが、刈っているだけで、いい芝じゃないか。スコットランドなんか、天然のゴルフコースみたいな所があるし、箱根あたりでも、熱海の方はいい芝生で……」

明男もスコットランドや箱根の草原を見た記憶があるが、どちらも車の窓から見たのだし、まだ

芝生に関心はないころだったから、あ、草原だと思っただけだった。それは兄が言うような芝生ではないように思ったが、反論する根拠がなかった。明男が煮えきらない受け答えをすると、

「お前の所は、買った芝だろう。その土地に自生したもんじゃないから、手入れを怠れば枯れてしまう。そうでなくとも、移植した芝には寿命みたいなものがあるんじゃないか。お前の所は何年だ」

「女房のおやじがはじめたんだから、四十年、ええと、五十年近いなあ。いや、十年ほど前に途中ではりなおしたけど、結局、古い芝も新しい芝と一緒になってきたんだし」

「寿命だよ」

兄は念を押すように言った。

「そうかな」

「芝はもう植えられた時の役目は終ったんだよ」

そうかもしれない、と明男は思った。彼の家の建っている土地には妻の伴子の父が五十年近く前に建てたのがあったが、彼が死んで伴子が相続した時に、家の方は建てかえた。古い家の一間を移築して、そこに伴子の母の松子が住んでいる。そして伴子自身は三ヵ月前から、アメリカの研究所に二年の予定で行っている。明男たちの間のたった一人の子供の定男は去年、地方の大学に入ってから、近ごろではその地方都市に根が生えかけたのか、休暇でもあまり家に帰ってこない。

このようにして考えてみると、伴子の父がたった一人の娘に養子をむかえて、と考えて建てたこの家屋は、所期の目的が達成されないままに、七年前に解体された。そして今の家族構成は死んだ老人の意志の継承でもなく、かといって、新しく別の意図を持った家族が現われたのでもない。つ

まり古い芝の上に一部はりなおした芝だった。
古い芝は家の改築の時にひどく傷んだので、その上に新しい芝を植えた。半年で古い芝と新しい芝は見分けがつかなくなったのに、それが今はもう雑草に荒されている。新しい家の方も、それを建てた時の家族構成やそれに基いた生活設計はくずれようとしていると明男は思った。役目が終ったのは芝と七年前に古材になった家ばかりではなかったかもしれない。そんなことを考えだすと、明男は兄との電話に気乗りしなくなった。
「兄さん、九時から、テレビで映画見るから電話は切るよ」
「そうか。何やってる」
「スパイ喜劇らしい」
「こっちでもやってるだろうな。おれもそれを見るか」
電話が切れた。しかし明男はテレビのある寝室に行かずに、しばらく書斎の机の前で、クリーム色の電話機を眺めていた。
それは老人がその場で人を呼べるようにと伴子が主張して、外線とつながった電話ではあるが、広くもない家の中の各部屋間の通話にも使えるものだった。しかし今、六つある電話機で、明男が呼んで答えがあるのは、松子の部屋だけだった。定男の部屋は誰もいない。隣の伴子の書斎も人がいない。居間も、明男夫婦の寝室も無人である。
もっとも、家の中にはもう一人伴子の死んだ父の遠縁の、留子という女がいる。彼女が夫を失って、明男たちと一緒に暮して家事を引き受けてくれるようになってから四年になる。そろそろ六十

に近いはずだが、彼女は七十六の松子とあまり仲がよくない。最大の原因は松子が留子を傭人だと思っているのに、留子には妙なプライドがあるためだった。留子としては確かに毎月の金をもらってはいるが、それは傭人の給料としては安すぎるし――それはその通りだった――一種の奉仕の精神から、家族の一員になっている、という気があるのだった。

確かに留子がいなければ、三度の食事はもとより、洗濯も、家の掃除もやりてがなくなってしまう。明男たちは身寄りがないという弱味につけこんで、初老の女を安い金でこき使っていると言って言えないことはないのだが、彼女の奉仕の精神も困ったものだった。たとえばお惣菜が心細くて、それを補うつもりでコーンビーフのカンを空けると、それがなくなるまで三食でも四食でもコーンビーフばかり。しかも松子や留子はあまり好きではないという理由で、明男が一人で食べなければならない。それに限らず、同じお惣菜を何食でも続けて喰わされるのは閉口だった。

「もったいないから、上っていただきます」

と言われれば、仕方なく箸をとるのだが、留子の高圧的な態度がいよいよ腹にすえかねると、明男は駅前の中華料理屋に、その近くの新聞販売所の店員たちと一緒に、丼物などを食べにゆく。

留子は自分が総入れ歯でみっともない食べ方をするから、人と一緒に食事ができないという。松子は体が不自由で自分の部屋までは膳を留子に運んでもらう。つまり、この家には目下、三人の人間がいるが、三人とも銘々一人で食事をするのだった。

無理もないと、明男は思う。彼はあと二年ばかりで五十になるが、三人の年齢を平均すると、六十をこえるであろう。この家自体がもう養老院みたいなものだと思う。伴子がいれば、同じコーン

ビーフにしても、何とか料理法を考えるだろうが、留子ときたら、それを一カン全部、玉ネギと一緒にいためて、あとにそれを何度でも温めなおすばかりだ。

定男がいれば、ギョウザが食べたいとか、てんぷらにしようとか言うし、すくなくとも彼は他のすべての家族の血縁に当るから、彼の注文した料理をみんなで食べることができた。息子がいたころから、松子と留子は一人で食事をしたが、それでも同じ物をたべているということから、一つ釜のメシを食うという感じがあった。しかし、定男と伴子がいなくなってみると、明男と松子と留子の間にあるのは、義理の関係ばかりだった。三人がたべる物も、いつの間にか違ってきてしまった。本来、家族になるべきでない三人の人間が、仮の家族を作っているのだった。生活の便宜のため、もう一つには定男という一点を通じて結びつけられているという自覚のために、生活を共にしてきたのだが、定男と、さらには伴子がいなくなってみると、同じ家に住む家族という嘘が今では覆いかくしがたい状態になってきたという感じがある。その証拠が三人で別々にとる食事であったし、三人が事務的なこと以外、ほとんど口をきかないということでもあった。

二

「奥さんいらっしゃらなくてお淋しいでしょう」

と明男はよく人に言われる。人が皆そう言うから、こういう状態を淋しいというのだろう。しかしこれが淋しさというのなら、淋しいということはよいことだ、という気がする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c